

# 『入阿毘達磨論』のギルギット写本残闕\*

松 田 和 信

## 1 写本の所在とローマ字転写

ギルギット写本のデリー・コレクションは、ラグ・ヴィーラ (Raghu Vira) とローケーシュ・チャンドラ (Lokesh Chandra) 父子によって、両氏の主催する『シャタピタカ・シリーズ』の第10巻 (全10分冊) に影印版の形で出版されたが、最終第10分冊の末尾には、種々雑多な未整理の断簡類が約70葉収められている (写真番号3221-3366)。この中には、その後正体が判明して出版された断簡も若干あるものの、印刷の不鮮明さもあってか、多くは解読されないまま放置されているように思われる。本稿で筆者は、それらの中から何らかの仏教論書の断片と思われる、破損のない完全な1葉 (シリーズ番号58, 写真番号3259-3260) を取り上げて、その正体について明らかにしたい。まず最初にローマ字転写から示しておこう。

folio 56 recto (facsimile 3259)

- 1 -vyākṛtaiva yathākramam\*(/) kāmarūpārūpyāptānām svadhāvāptaiva / amalānām traidhātuky anāsraṇā ca / mārgasatyam asaṃskṛtaṃ cāma-
- 2 lā dharmā tatrāpratisaṃkhyānirodhasya traidhātuki prāptiḥ (/) prati-  
saṃkhyānirodhasya tu rūpārūpyamārgalabhyasya tadāptaiva / a-
- 3 nāsraṇamārgalabhyasya {anāsraṇa} mārgasa {la} tyasya cānāsraṇaiva /  
seyam samasya caturvidhā bhavati / śaikṣāśaikṣāṇām
- 4 śaikṣāśaikṣī / naiṇāśaikṣānāśaikṣāṇām trividhā (/) sāsravaś cāsaṃskṛ-  
taṃ ca naiṇāśaikṣānāśaikṣā(!) dharmmāḥ tatra sāsravaṇām a-
- 5 pratisaṃkhyānirodhasya laukikamārgalabhyasya ca pratisaṃkhyāniro-  
dhasya naiṇāśaikṣānāśaikṣī / <śaikṣāśaikṣamārgalabhyasya tu śaikṣāśaikṣī />

darśanabhāvanāheyā-

folio 56 verso (facsimile 3260)

- 1 nām {/} darśanabhāvanāheyā (/) aheyānām tu dvividhā bhāvanāheyā  
aheyā ca / tatrāpratisamkhyānirodhasya laukikamārgalabhya-
- 2 sya cetasya bhāvanāheyā / amalamārgalabhyasya mārgasatyasya  
cāheyaiiva // aprāpti(ḥ) sarvaivakliṣṭāvākṛtāḥ(!) tenāsya prāpte-
- 3 r iva bhūyād(!) bhedo nāsti / kim tarhi naṣṭājātānām traiyadhvikī  
pratyutpannā(nām) dvaiyadhvikī sahajā nāsti // kāmarūpārūpyā-
- 4 ptānām pratyekaṃ traidhātuki (/) nāmālā kadācid aprāptir asti //  
pṛthagjanatvam ucyate (/) pṛthagjanatvam katamaḥ(!) ya āryadharmmā-  
nām alābha
- 5 ity abhidharmapāṭha(ḥ) // tṛṭiyādhyānavitarāgasya caturthadhyāna-  
bhaumacitta<caitta>pravṛttivirodhī viprayukto dharmo

## 2 文献比定とテキスト再構成

この1葉は、貝葉形樺皮に典型的なギルギット・バーミヤーン・タイプⅡ書  
体で書写され、表面の向かって左欄外に56のフォリオ・ナンバーが記されてい  
る。サイズについての情報はないが、大きなものではないであろう。ローケー  
シュ・チャンドラは、これに‘*Traidhātuki-prāpti*’の仮タイトルを付してい  
るが、本分冊の目次の項で同氏も述べているように、これは表2行目に現れる  
単語を暫定的に拾ったものであって、正しい表題ではない。筆者によると、こ  
の1葉は『入阿毘達磨論 (*Abhidharmāvatāra*)』の断簡に他ならない。『入  
阿毘達磨論』は、世親の『俱舍論』と同時代か、ややそれに先立つ頃に成立し  
たと見なされる「五蘊・三無為の八句義をもって有部の教説を略述」する「綱  
要書の入門書」である。すでに原梵文は散逸し、玄奘による漢訳(大正1554)  
(4)とジナミトラ等によるチベット語訳のみが知られている。著者については漢訳  
に塞建地(陀)羅と伝えるものの、チベット語訳には著者名を欠き、その原名  
は現時点では確定していない(6)。八句義という、他のアビダルマ論書にほとんど  
見られない形態をもって論述されているが、内容的によくまとまり、説一切有

部アビダルマの教義入門書にふさわしい。本論については、桜部建博士による和訳研究があり、必ずそれを参照せねばならないが、本断簡から回収される文章は、桜部博士の内容分節のうち、VI.「行句義」のC節である「不相応行」中の第1項「得・非得」にかんする議論の中の、vii.「得の諸門分別」が始まって直後の箇所からviii.「非得の諸門分別」をはさみ、さらに「不相応行」の第2項「無想定」の説明の冒頭部までの範囲をカバーする。

ここで桜部博士の和訳に従って上記ローマ字転写を分節して梵文テキストを再構成し、参考までに玄奘訳の対応箇所を示すと以下の通りである。<sup>(8)</sup>

VI. c. 1. vii. prāpti.

... (a)(56r<sup>1</sup>)vyākṛtaiva yathākramam (/) kāmarūpārūpyāptānām svadhātvāptaiva / amalānām traidhātuky anāsravā ca / mārgasatyam asaṃskṛtaṃ cāma(r<sup>2</sup>)lā dharmā tatrāpratisaṃkhyānirodhasya traidhātukī prāptiḥ (/) pratisaṃkhyānirodhasya tu rūpārūpyamārgalabhyasya tadāptaiva / a-(r<sup>3</sup>)nāsravamārgalabhyasya mārgasatyasya cānāsravaiva / seyaṃ samasya caturvidhā bhavati / śaikṣāśaikṣānām (r<sup>4</sup>) śaikṣāśaikṣī / naivaśaikṣānāśaikṣānām trividhā (/) sāsravaś cāsaṃskṛtaṃ ca naivaśaikṣānāśaikṣā dharmāḥ tatra sāsravaṇām a(r<sup>5</sup>)pratisaṃkhyānirodhasya laukikamārgalabhyasya ca pratisaṃkhyānirodhasya naivaśaikṣānāśaikṣī / śaikṣāśaikṣamārgalabhyasya tu śaikṣāśaikṣī / darśanabhāvanāheyā(56v<sup>1</sup>)nām darśanabhāvanāheyā (/) aheyānām tu dvividhā bhāvanāheyā aheyā ca / tatrāpratisaṃkhyānirodhasya laukikamārgalabhyā(v<sup>2</sup>)sya cetarasya bhāvanāheyā / amalāmārgalabhyasya mārgasatyasya cāheyaiva //

VI. c. 1. viii. aprāpti.

aprāpti(ḥ) sarvaivākliṣṭāvyaḥkṛtā tenāsyā prāpte(v<sup>3</sup>)r iva bhūyān bhedo nāsti / kiṃ tarhi naṣṭājātānām traiyadhvikī pratyutpannā(nām) dvaiyadhvikī sahaajā nāsti / kāmarūpārūpyā(v<sup>4</sup>)ptānām pratyekam traidhātukī (/) nāmālā kadācid aprāptir asti // pṛthagjanatvam ucyate (/) pṛthagjanatvam katamad ya āryadharmānām alābha (v<sup>5</sup>) ity abhidharmapāṭha(ḥ)//

VI. c. 2. asaṃjñīsamāpatti.

tṛtīyadhyānavītarāgasya caturthadhyānabhaumacittacaittapravṛttivirodhi

玄奘訳 (大正蔵28巻, 986b<sup>28</sup>-c<sup>26</sup>)

VI. c. 1. vii. 得の諸門分別

善法得唯善。不善法得唯不善。無記法得唯無記。欲界法得唯欲界。色界法得唯色界。無色界法得唯無色界。無漏法得通三界及無漏法。無漏法者、謂道諦三無為。俱不繫故。道諦得唯無漏。非摺減得通三界。摺減得色無色界。道力起者即墮彼界。無漏道力起者は無漏故。無漏法得總說有四種。学法得唯学。無学法得唯無学。非学非無学法得有三種。非学非無学法者、謂諸有漏及無為。有漏及非摺減得唯非学非無学。摺減得学道力起者唯学。無学道力起者唯無学。世間道力起者唯非学非無学。見所断法得唯見所断。修所断法得唯修所断。非所断法得唯有二種。謂修所断及非所断。非所断法者、謂道諦及無為。道諦得唯非所断。非摺減得唯修所断。不染汚故。是有漏故。故摺減得。世間道力起者唯修所断。無漏道力起者唯非所断。

VI. c. 1. viii. 非得の諸門分別

一切非得皆唯無覆無記性撰。非如前得有差別義。然過去未來法一一各有三世非得。現在法無現在非得。得與非得性相違故。無有現在可成就法。不成就故。然有過去未來非得。欲色無色界及無漏法一一皆有三界非得。無有非得は無漏者、非得中有異生性故。如說「如何異生性。謂不獲聖法。」不獲即是非得異名。又諸非得唯無記性。故非無漏。

VI. c. 2. 無想定

已離第三靜慮染、未離第四靜慮染、第四靜慮地心心所滅、有相應法名無想定。

### 3 桜部訳とその補綴

筆者による和訳を提示しておくべきであろうが、定本とでもいうべき桜部博士の和訳がすでにあるので、ここでは博士の和訳をそのまま再録し、梵文が明らかになったことにより補足・訂正すべき点のみ博士の元の文章を変更し、下線を付してその部分が筆者によって変更されたか、もしくは注意すべき箇所であることを示す。その根拠については注記しておくことにしたい。なお、博士の和訳はチベット語訳に基づくものであるので、ここでチベット語訳と梵文オ

リジナルの相違点も明らかになる。<sup>(9)</sup>

### VI. c. 1. vii. 得の諸門分別

(1) (善・不善・無記なる〔法〕の〔得〕は、) (r<sup>1</sup>) その順に (yathākramam), ただ (善・不善・) 無記である。(2) 欲・色・無色〔界〕繫 (-āpta) なる〔法〕の〔得〕は、それぞれ自らの界 (svadhātu) にのみ繫属する。無垢 (amala) なる〔法の得〕は三界〔繫〕および無漏 (=不繫) である。すなわち、道諦と無為〔法〕とが無垢〔なる法〕であるが、その中、非択滅の得 (prāpti) は〔通じて〕三界〔繫〕である。色・無色〔界〕の〔有漏〕道によって得られる (labhya) 択滅の<sup>(10)</sup>〔得〕はそ〔の色・無色界〕に繫属する。無漏道によって得られる<sup>(10)</sup>〔択滅の〕<sup>(10)</sup>〔得〕と道諦〔の得〕とは無漏である。総じて言えば (samasya), こ〔の無漏法の得〕は、三界〔繫〕と無漏との<sup>(10)</sup>四種である。(3) 学 (śaikṣa) と無学 (aśaikṣa) となる〔法〕の〔得〕は〔それぞれ〕学と無学とである。非学非無学 (naivaśaikṣānāśaikṣa) なる〔法〕の〔得〕は三種である。すなわち、非学非無学なる法とは有漏〔法〕と無為〔法〕とであるが、その中、有漏〔法〕と、非択滅と、世間道 (laukikamārga) によって得られる<sup>(10)</sup>択滅の〔得〕は非学非無学である。学と無学との道によって得られる<sup>(10)</sup>〔択滅の〕<sup>(10)</sup>〔得〕は〔それぞれ〕学と無学である。(4) 見ること (darśana) 〔によって〕断ぜられるべき法と修習 (bhāvanā) によって断ぜられる (heya) 〔法〕との〔得〕は、(v<sup>1</sup>) 〔それぞれ、〕見ること〔によって断ぜられるべき〕と修習によって断ぜられるとである。断ぜられることのない (aheya) 〔法〕の〔得〕は二種である。すなわち、修習によって断ぜられるものと、断ぜられることのないものとのである。断ぜられることのない〔法〕とは道諦と無為とである。<sup>(10)</sup>その中、非択滅と、〔それとは〕異なる<sup>(10)</sup> (itara) 世間道によって得られる〔択滅〕との〔得〕は修習によって断ぜられる。無垢の道 (amalamārga) によって得られる<sup>(10)</sup>択滅と道諦との〔得〕は断ぜられることのないもののみである。

### VI. c. 1. viii. 非得の諸門分別

(1) 非得 (aprāpti) はすべてが不染汚 (akliṣṭa) であり、無記であって、それゆ

えにこれは得と同様に多くの (bhūyas) 差別があるのではない。(2)ではどうかという<sup>60</sup>と、已生 (naṣṭa, 過去) と未生 (ajāta, 未来) と [の法] の [非得] は三世にわたる。現在 [の法] の [非得] は, [過去と未来との] 二世であって, [法とその非得とが] 俱に生ずること (sahaja) はない。(3)欲・色・無色 [界] 繫 [の法] の [非得] はそれぞれみな三界にわたる。非得であって無垢なるものは決して無い。<sup>61</sup>異生性 (prthagjanatva) が説かれる。<sup>62</sup>「異生性とは何か。聖者の法を得ないこと (alābha) である,」とアビダルマ [論] 中に出ている。<sup>63</sup>

## VI. c. 2. 無想定

第三静慮より離貪した人 (vītarāga) にとつての<sup>64</sup>, 第四静慮地の (-bhauma) 心・心所の生起することに背く (pravṛttivirodhin) 不相応法が, (無想定といわれる。)

### 註

\*この小論を恩師桜部建先生に捧げます。

- (1) Raghu Vira & Lokesh Candra, *Gilgit Buddhist Manuscripts (Śatapiṭaka Series, vol. 10) 10 parts* (New Delhi, 1959-1974). 1-2分冊のみ合冊されて1970年に再刊されている。さらに昨年(1995)10分冊を3冊にまとめ、新たな二万五千頌・一万八千頌『般若経』断簡73葉(写真番号3369-3514)を末尾に付け加えて再刊されたが、印刷状態はよくない(*Bibliotheca Indo-Buddhica Series, Nos. 150-152*)。
- (2) 例えば、この中のシリーズ61(写真番号3360-3365)は釈論を含むナーゲルジュナの『因縁心論頌』に比定されて出版されている。V. V. Gokhale with M. G. Dhadhphale, "Encole: The Pratītyasamutpādahṛdayakārikā of Nāgārjuna", *Principle V. S. Apte Commemoration Volume* (Poona, 1978) pp. 62-68. またシリーズ55に含まれる写真番号3239-3240の1葉は、ベルリン大学のハルトマン教授によって根本説一切有部『長阿含』の *Arthavistara-dharmaparyāya* に比定されている。Jens-Uwe Hartmann, "Fragmente aus dem Dīrghāgama der Sarvāstivādin", *Sanskrit-Texte aus dem buddhistischen Kanon: Neuentdeckungen und Neueditionen (Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden, Beiheft 2)* (Göttingen, 1989) pp. 38-67, esp. p. 41.
- (3) ローマ字転写に使用した記号: ( ) 筆者により任意に補われた文字; { } 誤写された文字, 削除して読む; < > 欄外に書かれた文字; (!) Sic.; \* virāma.
- (4) 桜部建『俱舍論の研究』(法蔵館, 1969) 60頁の記述による。

- (5) チベット語訳は、北京版 (=P.ed. 大谷 No. 5599) Tu 393a<sup>8</sup>-417a<sup>8</sup>, デルゲ版 (=D.ed. 東北 No. 4098) Ņu 302a<sup>7</sup>-323a<sup>7</sup>. チベット大蔵経には著者不明の『入阿毘達磨論』注釈書が1点収められているが(北京版, 大谷 No. 5598, *Sārasamuccaya nāma Abhidharmāvātāra-ṅkā*), 他にトカラ語, およびウイグル語訳による注釈書断片が発見されている。井ノ口泰淳「*Abhidharmāvātāra-prakaraṇa* 注断片」(「トカラ語およびウテン語の仏典」)『中央アジアの言語と仏教』所収(法蔵館, 1995) 76-89頁。百濟康義「トカラ語Bによるアピダルマ論書関係の断片について-I. *Abhidharmāvātāra-prakaraṇa* 註」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』13号(1974) 21-36頁。同「入阿毘達磨論の注釈書について」『印度学仏教学研究』29巻1号(1980) 411-406頁。
- (6) 『入阿毘達磨論』の著者については、次注に示す桜部訳の序言, および, 同「ぼろつくりい(研究ノート)」『仏教学セミナー』35号(1982) 44-50頁, 西村実則「『入阿毘達磨論』の著者」『浄土宗教学院研究所報』9号(1987) 6-11頁参照。
- (7) 桜部建『*仏教語の研究*』(文栄堂, 1975) 121-176頁。これは『大谷大学研究年報』18集(1965)に掲載されたものの再録。なお, M. van Velthem によるフランス語訳も発表されている。*Le Treitié de la Descente dans la Profonde Loi (Abhidharmāvātārasāstra) de l'Arhat Skandhila* (Louvain-la-neuve, 1977)。
- (8) テキストを再構成するにあたって, ローマ字転写における{ }内の文字およびヴィラーマ記号は削除し, 'sic' の記号を入れた箇所は訂正した。また dharmma 等は dharma 等と正規形に戻した。ただしサンディ規則の乱れについては訂正していない。漢訳については, 梵文テキストに対応する前後の文章を補って示す。チベット語訳については掲載を省略するが, 対応箇所は, P.ed., Tu 410b<sup>8</sup>-411a<sup>8</sup>, D.ed., Ņu 319a<sup>7</sup>-318a<sup>2</sup> 参照。
- (9) 桜部前掲書163-165頁参照。なお対応する前掲 M. van Velthem のフランス語訳は57-58頁参照。チベット語訳からなされた桜部博士の和訳を梵文テキストによって訂正するには, チベット語訳の基づいた原典とギルギット写本から回収された梵文テキストが同一のものであるとの前提に立つ必要があるが, 必ずしもそれが保証されているわけではない。従って, 筆者の訂正は, 博士の和訳を通してチベット語訳の曖昧にして不完全な点, あるいはチベット語訳とギルギット写本版梵文『入阿毘達磨論』の相違点を指摘するものであると考えて頂きたい。なお, 漢訳との相違点についてはいちいち指摘しない。和訳中に挿入された梵文語彙は筆者による梵文テキストから補われたものである。
- (10) 「…によって得られる (-labhya)」の語は, チベット語訳では thob pa (P.ed., 410b<sup>8</sup>, D.ed., 317b<sup>2</sup>) と訳されているが, 桜部訳では, 恐らくこれを prāpti の訳語と見て, 次注で指摘する箇所 で用いたため, ここでは訳されていない。-labhya と prāpti のチベット語訳が同じであることによる混乱。同様の箇所がさらに2度見られる。次注参照。

- (1) 前注で指摘したような事情で、桜部訳は、ここでの「得」の語を括弧に入れていない。しかし、「得」の語は、正しくは梵文テキスト、チベット語訳とも省略されているのである。ここで「得」と見なされた *thob pa* は *-labhya* の訳語である。
- (2) この下線部分は梵文テキストに欠く。チベット語訳には存するので (P. ed., 410b<sup>6</sup>, D. ed., 317b<sup>2</sup>)、桜部博士も訳しているが、漢訳には「無漏法得総説有四種」とのみあって梵文に一致する。これはテキストに欠落があるのではなく、チベット語訳の基づいた原典が異なっていた可能性の方が高いと思われる。
- (3) 桜部訳は「有漏〔法〕と非択滅と〔の得は非学非無学である。〕世間道による択滅の得は〔非学〕非無学である。」と二つの文章に分割して訳し、括弧に入った「の得は非学非無学である。」と「非学」の部分は原文 (チベット語訳) に脱漏があると注記しているが (164頁注7)、この箇所は、チベット語訳の曖昧さ (つまり単語を並べただけ) の典型的一例であって、筆者の訂正訳文で問題がないことは梵文テキストを見れば一目瞭然である。チベット語訳者もこの箇所については筆者のテキストと同じ文章を見ていたに違いない。この箇所は、1. 有漏法の得、2. 非択滅の得、3. 世間道によって得られる択滅の得について説かれている。
- (4) この部分は梵文テキストに欠落している。チベット語訳が (従って桜部訳が) 正しい。漢訳にも「非所断法者、謂道諦及無為」とある。
- (5) チベット語訳では *itara* をはっきり *cig sós* (P. ed., 411a<sup>2</sup>, D. ed., 317b<sup>5</sup>) と訳しているが、桜部訳には欠落。
- (6) 「択滅」の語は梵文テキストに欠く。
- (7) *kim tarhi* を訳したものであるが、チベット語訳には (従って桜部訳には) 見出しされない。
- (8) *kadācid* を訳したものの。チベット語訳では *gañ yan* (P. ed., 411a<sup>5</sup>, D. ed., 317b<sup>7</sup>) と訳されているが、桜部訳では省略されている。
- (9) この部分はチベット語訳には (従って桜部訳には) 見出しされない。
- (10) これは桜部訳 (つまりチベット語訳) のままであるが、梵文テキストには *abhidharmapāṭha(h)* とあるので、正確には「というアビダルマの誦唱の句がある」とでもすべきか。これは桜部博士も注記しているように (164頁注8) 『発智論 (*Jñāna-prasthāna*)』の言葉である。
- (11) 桜部訳では「第三静慮より離貪し」と、後につづく形容詞に訳しているが、梵文テキストを見れば明らかなように、属格で置かれている。これもチベット語訳の曖昧さの典型的一例である。

1996年1月23日